
金色に輝くお菓子な話

由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色に輝くお菓子な話

【Nコード】

N0008B

【作者名】

由宇

【あらすじ】

リンゼしか知らない、特別な日。私たちは影からそっと見守って、時に笑ってやろうね。

（前書き）

文章の練習。何が書きたかったのかわからない。

そこは、闇に沈む一つの部屋だった。

いつもは闇に沈むこの部屋は、今日は珍しく、ゆらゆらと赤い光がうごめいていた。

赤い火は地面へと流れ、波打ち、その動作を繰り返している。まるで生きているような錯覚すら覚える。

そして、その火が持ち上げるような形で、大きな黒い釜が熱せられていた。

火が、あまりにも高温なため、火に直接触れる部分は赤く、危険な色に染まっている。焦げ臭い臭いも気になった。

そんな釜の隣に、階段のついた、高い台が無造作におかれていた。

その黒い頂上に、不意に白いふわふわとしたものがゆれた。

フリフリの白いレースに、小さな花の飾りを散らし、大きく膨らんだスカート。

ウエディングドレスを思わせるような、純白の、絹の洋服。

そして、今にも足のかかとで踏んでしまいそうなくらい長い金髪を、耳元で一つにむすんだ小柄な少女――リンゼは釜の中に入った長い銀色の棒を、汗を流しつつ、必死にかきまわしていた。

リンゼが動くたび、ふわふわのスカートと、金色の髪の毛がゆれる。突然、リンゼは棒をかき回していた手ピタリと止め、その空色の瞳で釜の中を見下ろした。

ピンク色のその液体からは、痛いくらい熱い湯気が立ち上り、マグマのように、泡ができては、また消えていった。もし間違って落ちてしまったら、間違いなくリンゼの命はないだろう。

「……できた」

今にも消えてしまいそうな小さな声だった。

リンゼは釜の中身から目をはなし、黒い床に目をうつした。

一瞬無意味に息を止め、少し膝をまげて、台から一気に飛び降りた。二つにむすんだ髪の毛が、蝶のようにひらひら空中を舞い、ふりふりの洋服がレースの波をつくり、リンゼを飲み込んだ。

音もなく床に着地すると、リンゼは床に置いてあった黒いバケツを手にもった。

中の銀色の液体が、円をえがいている。

リンゼはそれを両手にもつと、今だに燃え動く火に一気にかけた。肉が焼けるようなすさまじい音と、異常なくらいの白い水蒸気が、闇の部屋を白く染めた。そして、リンゼの姿をも隠してしまった。

やがて、水蒸気は消え、また部屋は闇に飲み込まれた。赤い火が消えたぶん、余計に暗く、ほとんど何も見えない状態だった。

いつのまにか、リンゼは台の上に、銀色の等身大のスプーンを抱え、釜を覗きこんでいた。すっかり、あの熱い湯気は消え、ひんやりとした空気が顔にかかった。

リンゼは台に膝をつき、ゆっくりとスプーンをおろし、ピンクの表面を突いた。

少し突いたところが、三日月みたいな形にへこんだ。

ちゃんと、固まっている。

「やった！ 成功した！」

リンゼはその場でガッツポーズをとると、スプーンでピンク色の固体をすくった。

スプーン一杯、ピンク色に染まると、そろり、そろりと引き寄せた。

「こんなに作らなくてもよかったかなあ……」

ポツリとつぶやき、スプーンの中の固体を手にくい、口にした。口のなかで、綿のようなザラザラした感触でいっぱいになり、同時に言葉には表せないくらいに甘さがリンゼを襲った。

それでもリンゼは満足そうに頬を赤らめた。幸せに満ちた顔で、フリルのスカートのポケットに手を入れた。

「大成功！ これでもう、あいつは逃げられないわ！」

リンゼがポケットから手を抜くと、手には透明な袋と、赤くて長いリボンが握られていた。

リンゼはそれらを口にくわえ、ピンクの固体を両手いっぱいにとりこねはじめた。ベタベタした感触が、やがてサラサラとした肌ざわりに変わっていった。

だんだんと、形が整ってきて、なにやらハートの形に仕上がった。

それを口にくわえていた袋に、そつといれ、リボンできつくしばった。

リンゼの顔は、幸せの色に染まっている。

「よし！」

と小さく発したあと、リンゼは台から飛び降りた。

細い足を素早く回転させ、壁の小さな出っ張りに、手をかけた。それを引くと、馬車のはしるような音とともに、部屋に光が差し込んだ。

リンゼは閉めるのも忘れ、あわてて急ぐように部屋を出ていった。

光は、まだ大量にピンクの固体が入っている鎌を照らしている。

甘い匂いが、その部屋を支

配していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008b/>

金色に輝くお菓子な話

2011年1月18日03時34分発行